



入道場の巻

(入道場の心得)

生死事大無常迅速を忘るゝ勿れ、
生の從來する所、死の趣向す所は何れ、
何を以てか一大事とする、

我とは那邊なものをかきす、我所もまた然り、此軀これなにもものぞと自ら窮めよ、
此身及びこの世すべて夢の如くなるをよく細かに思ひみるべし、
此まゝの境界幻の如くなること眞實にあらざることをしるべし、

三業を調熟すべし、みくちこゝろ
口に稱へて佛を捨てざれ、意に見佛の想を離さざれ、常に佛の照鑑をかしこめ、
首座 先づ大衆を勧めて三寶に歸せしめよ、首座たるものは大衆の模範となるもの
なれば最も佛祖の照鑑をかへりみ、内佛意にかなふよふ、外儀如法たるべし、

加行の巻

内常に佛を離れず、外威儀嚴

入道場前方便

別時道場に入らむと欲せば此四法を備へて而して後に加行する時は其功必ず成すべし、若ししからざれば勞多くして功少なし、

一、少欲—六道生死の苦海を離れんと欲し、念佛三昧を得て眞實身の阿彌陀佛及光明淨土莊嚴の相を見んと欲する志を養ふべし、經中の要文を讀みては、彼西方彌陀佛をおもひ、相互にすゝめて志しを淨土に誘ふべし、語ることも多くは淨土を讃嘆せよ、いつしか志し深くなりゆくべし志し深くなりゆくにしがつていよく願ふ心も起るべし、願ふ心益々切なるによりてこれを好む心切なるべし、之れを好むこと深ければ又之れを樂欲すること切なるべし、樂欲とは佛及び淨土を見んと樂欲する心なり、
二、精進—一心堅固にして五蓋を棄つべし、五蓋のために蓋はるときはたとへ道場に入とも唯空しく時日を消費するのみ、何の益かあらん、精進とは一心金剛の如く我を忘れて阿彌陀佛に精密に進みゆくなり。
三、念—世間は皆悉く虚偽なり欺誑なりこの虚偽の幻境にまどはされて眞境にいたること能はず哀れむべし、唯眞境の阿彌陀佛を晝夜戀念してしばらくも忘るゝことなく乳子の母を慕ふが如し、
良に惟れわれ我ら無始より生死の暴流におぼれ無明惑業の羅刹に害惱され暫くも安穩なることを得ず、幸に遇ひ難ふして彌陀慈父の御名を聞くことを得たり、殊に八萬相好我を照覽し佛眼我を視、慈悲子を思ふの深き御心を察し上れば須臾も憶想せざることを得んや、我佛を念すること深ければ佛もまた我をおもふことまた切なり、古來見佛するもの多くは戀念のふかきにあり。

四、巧慧—善巧慧を以て世間娛樂は夢幻の如くなることを籌量して三昧定樂の最と

も勝妙なることをしる、巧慧なきときは妙境界に入ること能はず、巧みに佛の相好をとり淨土の莊嚴光相を察して正境に入るべし。

(有影しのみありて観像なく明治三十幾年頃のもの)

四

起信論

聽記(9)

雖說離念皆無能所者明念即無念非滅於念非滅念故名離念離於斷見即無念故皆無能所離於常見於一念間離此二見見此無二之法故能稱順中道(離斷常隨順法性)也又亦可雖狂於彼言念等中觀此念等常無能所離未離念而順於無念故名隨順此釋方便觀也久觀不已即能離茲妄念契入彼無念真理故名正觀云得入者觀智契入也。

眞如とは下末五メ云有言說者尙知如來善巧方便假以言說引導衆生依言說有二義者顯此二義若離於言即唯一味今既依言說有二不可即隨言執取也但爲生物信解故說此文故地論云何故不說無言示現依言求解故

五

如實空とは中末五メ如實空鏡對能所分別不相應故眞如實性空無妄染空遮諸相一言也諸相者即妄念也

六

此以如眞一理實所顯之中空能顯三細六塵無妄染故云如實空非謂如實自空此則如實之空依主釋也以妄空故遂能顯示真理故云顯實也故中邊論云無能取所取有能取所取無是名空相故也。

二者如實不空以有自體具足無漏性功德故大智慧光明十力四無畏等不空とは有二種一異妄無體故云有自體二異恆沙有漏煩惱故云具足無漏性功德故

空本體を消極的に詮表せば、自然を形成せる時間空間の因果律より生ずる物質存在一切意識的心象を超え一切差別の相を絶したり。有無等の相待的概念は悉く相應せず。

本質は超空超時超差別にして、而も一切に遍せる心的存在不空積極的に表明せば自性天真永恒一切内存の精神態又總該萬有心と云ふ(此は華嚴にて云ふ)本質は非内非外に遍滿一切萬有を總括せる觀念的存在

心物二質の中に存在して而も無碍なり。永恒とは三世を盡くして同時態。

精神態とは物心一如の眞心永恒萬物中に存在す若本體が意識的ならば如何にして物質を表はすであらう、又物質ならば如何に依つて精神が出来るか否宇宙は精神即觀念態なり。

言一切染法不相應總舉能所分別皆不相應離差別相者離所取相故以無妄念者離能取見故又以妄境從妄念生故釋顯空無也良以倒心安境情有理無眞如德理有情無故不相應なり。言非有相者眞明離妄有惑者云既其非有即應是無釋云我非汝妄有故

七

說非有、非說、是無、如何執、無故云、非無也。惑者聞上、非有、又聞、非無、別謂、
 雙非、是真如法、釋云、我非、汝謂、有說、非有、非謂、法體、是非有、非、汝謂、無說、
 非無、非謂、法體、是非無、如何復執、非有、非無、故云、非々、有非々、無也。惑者又
 云、我上立有、立無、汝並、雙非、雙非、若存、即有、無隨、喪今、雙非、既非、我有、無還、立
 釋云、我非、汝雙、故說、非々、非、許、雙是、如何復執、俱相、故云、非有、無俱、也
 非、一相、性具、萬德、故非、異相、萬能、體故、一異、俱相、准前、四句、可知、然執、取離、
 多攝、不過、此二、四句、

乃至以有妄心、無明妄執三細念々分別六塵分別、或一或異等不相應、不順
 無念、真理、真如、無明、有念、無念、

故說爲空、真如爲空

若離妄心、無明妄執を離るればなり

實無可空、故真如體非空、無以妄、無爲空、反結也、以對妄染無、說真爲空
 非無、如體、以爲空也、亦可此文、是釋疑、疑者聞上、真空、則撥無真體、及恆沙
 功德、故爲此釋、是則明空、真如體、不異不空也

所言以下は如實不空。已にとは前如實空。空とは空は清淨眞

牒前とは前眞如無妄。顯後とは不空義。即是は上如實空、眞心體常と
 は常德不生不滅三際四相不能遷

恆は樂徳寂滅無生老病死苦故

不變我徳也以離變易苦非業所繫自在故也

淨法滿足淨徳 無量功徳大智光明

無相有可取相とは眞如淨相惑者聞淨法不空、則謂同於情執之有、故此釋
 也是則不空不異於空

以離念境界唯證相應、故釋無相、所以也、若妄念、所緣、是則有相、既唯眞智之
 本境、明知無妄執之相也

一切智、一切能、即ち遍動力を以て時間空間の形式により萬物の爲に秩
 序の根底とし一切を規定し生活活動せしむ。
 眞如の本質は精神體、即ち觀念的存在なるが故に、自己の觀念と冥
 合するによりて證のみ相應すと云ふ。
 精神態になれば不空で有無くしても無になるものでなし。(以下斷絶)

(以上起信論職筆記なれば勿論親筆なし——以下斷絶して筆記も無し)

昭和八年十二月二十五日 印刷
 昭和八年十二月二十八日 發行 (誌代年壹圓)
 編輯兼 山崎 辨成
 發行人 小石川區關口町六十五番地
 印刷人 小林 七太郎
 印刷所 小石川區關口町六十五番地
 印刷所 靜文社 印刷所
 電話牛込五四一九番
 東京市小石川區水道橋二丁目四十四番地
 ミオヤのひかり社
 振替口座東京六八五一番